

〈論文〉

日本語の与格主語構文の分析

—— 日本語の主語特性と多重照合理論 ——

佐 貫 繁

キーワード：与格主語，主格目的語，多重素性照合，経験者，主題，空主語言語

1. はじめに

本論文は日本語の与格主語構文を現在進展中のミニマリスト・プログラムの枠組みで分析し、人間言語の観点から理論的に捉えようとするものである。与格（日本語の「に」）が付与される経験者は、世界の言語においてその振る舞いが異なっている。例えば、与格が主語位置に現れる言語には、日本語やアイスランド語、イタリア語、スペイン語などがある一方、与格が主語位置に現れない言語には、英語やフランス語などがある。後者の言語タイプでは、経験者である与格が主語位置に現れることができない為に、その下に在る主題項が主語位置に移動して主格（日本語の「が」）を受け取る。興味深いことに、日本語の場合には、経験者項「に」だけでなく、主題項「が」までもが主語位置に必ず移動する。経験者が関与する言語間の振る舞いは、その各言語の主語特性にまで還元され、それによってきれいに説明されるということが本論文で示唆される。本論文の分析は、全ての言語の与格経験者構文に対して、拡張されていく可能性を切り開いていることが予想される⁽¹⁾。

2. 与格主語構文

日本語において、いわゆる心理動詞が用いられるか、「一（ら）れ」のような状態を表す接尾辞（助詞）が述語と結びつく場合に、与格主語構文が生じうるのは、日本語の数多くの文献で指摘されている。最近では Ura (1999) を参照。

- (1a) 太郎に（は）ヘビが怖い
- (1b) ジョンに（は）メアリーが心配だ
- (1c) ケンに（は）そのニュースが驚きだ

興味深いことに、日本語の与格主語構文（「に」格が主語位置に現れる構文）では、主題項（心理を引き起こす対象）は常に「が」格が与えられることが指摘されている。例えば「に」格の主語とともに、主題項が「が」格ではなく、以下のように「を」格を受けとった場合には非文になる。

- (2a) *太郎に（は）へびを怖い
- (2b) *ジョンに（は）メアリーを心配だ
- (2c) *ケンに（は）そのニュースを驚きだ

日本語の「が」格を受け取る目的語（主格目的語）の振る舞いが、非常に興味深い問いを引き上げていることは生成文法の歴史の中で多くの関心を集めてきた。P & P のアプローチにおいて Takezawa (1987), Tada (1992, 1993), Zushi (1995)。ミニマリスト・プログラムの格照合理論において Ura (1999), Hiraiwa (2001)。Tada (1992) は Agr という統語構造に基づく格理論において、主格目的語が文の AgrOP-Spec で照合され、「が」格を受けとると主張している。それに対し Ura (1999), Hiraiwa (2001) は、日本語の与格主語構文は多重素性照合理論によって、主格目的語が「が」格を TP-Spec で照合すると分析している。また注目すべきことに、主格目的語を可能とする述語の全てが「に」格主語を可能とするわけではないことが指摘されている (Kuno (1973))⁽²⁾。

与格主語構文は通常、語彙特有の性質を帯びている。

以下の心理動詞（＝経験者構文）には、一連の格の配列パターンがある^(3, 4)。

- 主語（主格）—目的語（主格）パターン
- (3a) ジョンがメアリーが心配だ
- 主語（主格）—目的語（対格）パターン
- (3b) ジョンがメアリーを心配だ
- 主語（与格）—目的語（主格）パターン
- (3c) ジョンにメアリーが心配だ
- *主語（与格）—目的語（対格）パターン
- (3d) *ジョンにメアリーを心配だ

心理動詞が経験者に「に」格を与えられず、また「を」格も与えることができない場合、(3a)が生じる。この場合、（心理を知覚・認識する）経験者は T の EPP 素性と Φ 素性を受け取る為に、TP-Spec に移動される。経験者は TP に一番近い要素なので、この経験者が T の「が」格や「は」格を (LF で) 受けとる。また主題項の「が」格も T によって与えられる。日本語では、このように T の「が」格が多重素性照合関係に入ることができると想定される (Hiraiwa (2001) 参照)⁽⁵⁾。

一方で「に」格が与えられずに、「を」格を与えることができる場合、(3b)が生じる。この場合、

通常の単純他動詞文と同じである。この状況では、「を」格が与えられるので経験者が（外項として）主語位置に現れている。注目すべきなのは、特定の心理動詞が経験者に対し「に」格を与えることが可能であり、しかしながらその動詞が「を」格を与える力をもつかどうかは語彙的に決定されるということである。従って、心理動詞の違いによって格の配列パターンは、語彙ごとに多様性があることが予想される。

「好き」「嫌い」のような心理動詞は「が」―「が」や「が」―「を」のパターンを可能にし、「に」―「が」パターンは許さない。

(4a) ジョウが/*に うなぎが 好き/嫌いだ

(4b) ジョウが うなぎを 好き/嫌いだ

従って、このタイプの心理動詞では「を」格が用いられないことが可能だが、経験者に「に」格を与えることは許されない。また「驚き」のような別の心理動詞は、「に」―「が」だけでなく、「が」―「が」パターンも可能にするが、「が」―「を」パターンは許されない。

(5a) ジョウが/に そのニュースが驚きだ

(5b) *ジョウが そのニュースを驚きだ

従って、このタイプは経験者に「に」格を与えることが可能である一方、主題項に「を」格を与えることは許されない。

また既に述べたように、日本語の接尾辞「―(ら)れ」は、それが結びつく述語の主語が「に」格、その目的語には「が」格が付与されることを可能にしている。

(6a) コナンにその謎が解ける

(6b) マイクにその字が読める

与格主語（「に」格主語）を備える述語に接尾辞（助詞）が結びつく場合でさえ、日本語の文には主格目的語（「が」格）がなければならない（Kuno (1973)）。この制約によって、以下の例は排除される。

(7a) *コナンにその謎を解ける

(7b) *マイクにその字を読める

3. 与格主語の主語らしさ

この節では、日本語の与格主語（「に」）が実際、どのくらい主語らしさを示すのかを検証する。与格主語が統語的に主語として見なされなければならないことは古くから確立されている（Shibatani (1977, 1978)）。

第1に、与格主語は主語志向の照応形（「自分/自分自身」）を指することができる。

(8a) ジョンには 自分が/自分自身が 心配だ

(8b) ジョンには k メアリーが 自分 k/自分自身の k 先生に引き合わせ（ら）れる

第2に、与格主語構文における与格主語は従属副詞節内の「一ながら」構文の意味上の主語（PRO）を指することができる。「に」格の主語がPROを指すことができるのは、T（のΦ素性）との素性照合関係に入っていることを示唆している（Chomsky (1995b), Ura (1999)）。

(9a) PRO ストライキをやっていながら、労働者に（は）その目的が分からなかった

(9b) PRO 音楽を聴きながら、ジョンに（は）本が読める

以下の(10)が不適格であることを示しているように、日本語の「一ながら」構文内のPROは、主語ではない要素「メアリー」によって、指示されることは許されない。

(10) PRO k/*i 音楽を聴きながら、ジョンが k メアリーを i 騙した

このことが正しければ、(9)によって示される事実は、日本語の与格主語構文における与格主語がTとの（Φ素性の）照合関係に入っていると結論づけることができる。

さらに、与格主語がTとの（Φ素性の）照合関係に入ることを示す強い証拠がある。以下の(11)では主語の敬語化が為されている。

(11a) 山田先生が生徒をお助けになった

(11b) *生徒が山田先生をお助けになった

Harada (1976) や Shibatani (1977) は、いわゆる日本語の主語の敬語化は主語という機能をもつ要素によってのみ引き起こされると主張している。この主張をP & Pアプローチに捉え直しながら、Toribio (1990) は主語の敬語化はT（のΦ素性）によって為される（Spec-Headの）一致関係によって引き起こされると論じている。このことが正しければ、以下の例の適格性は日本語

の与格主語構文における与格主語が T との (Φ 素性の) 照合関係に入っていることを示唆している。

- (12) 山田先生に (は) その問題がお分かりになる

この節では、日本語の与格主語構文の与格主語は主語らしさを示していることを見てきた。つまり、与格主語 (「に」) は主語志向の照応形を指せること、従属補文内の PRO を指せること、主語の敬語化が可能であること。これらの統語現象から、日本語の経験者「に」格は、統語的には主語として見なされなければならないことは明らかである。

4. 主格目的語の目的語らしさ

日本語の与格主語構文においてどのくらい主格目的語 (「が」格) が目的語らしく振る舞うのかを見ていくことにする。第 1 に、主格目的語は主語志向の照応形「自分/自分自身」を指すことができない。

- (13) *人事部に新人が i 自分 i/自分自身の i 上司に今すぐ引き合わせ (ら) れる

以下の事実は、主格目的語「新人」が本質的には「自身」を指すことができることを示唆している。(13)と(14)を比べてみよう。

- (14) 人事部に新人が i 彼自身の i 上司に今すぐ引き合わせ (ら) れる

第 2 に、主格目的語は日本語の「一ながら」構文内の意味上の主語 (PRO) を指すことができない。

- (15) PRO k/*i 酒を飲みながら, ジョン k にメアリー i が騙せる

PRO を指示できるのはあくまで与格主語「ジョン」であって、主格目的語「メアリー」ではないことに注目すべきである。

第 3 に、主格目的語は (前提として日本語の主語との (overt な) 一致を明示するとされる) 主語の敬語化を引き起こすことができない。この事実は以下の (16) で示されている。主格主語が適切に主語の敬語化を引き起こしている (17) と比べてみよう。

- (16) *学生に山田先生がお気に入りだ (cf. 山田先生がその学生をお気に入りだ)

- (17) 山田先生が生徒をお助けになった (cf. *生徒が山田先生をお助けになった)

こういった上の観察から導き出される結論は、日本語の与格主語構文における主格目的語は、主語らしさを備えていないというものである。その経験的証拠として、主格目的語は与格主語とは異なり、従属副詞節内の意味上の主語 (PRO) を指すことができないこと、主語志向の照応形を指すことができないこと、主語の敬語化を引き起こすことができないことを見てきた。

5. 主格目的語の主語らしさ

しかしながら、日本語の与格主語構文の主格目的語が、一見通常の主語のように振る舞うことを示唆する事実がある。Tada (1993) は、(与格主語構文における) 主格目的語からの所有者繰り上げが適用可能であることを報告している。この所有者繰り上げは、一般に日本語では「を」格が与えられる目的語位置からは不可能だと想定されている。

以下のような例がある⁽⁶⁾。

- (18a) 僕に/が [ジョンの妹] が心配だ
 (18b) 僕に/がジョンが [t 妹] が心配だ
 (19a) 僕が [ジョンの妹] を心配だ
 (19b) *僕がジョンを [t 妹] を心配だ

実際、この事実は(与格主語構文における) 主格目的語は主語らしさを備えていないという結論と矛盾しているように思われる。むしろこの事実は、本論文の枠組みで想定される、日本語の主語の多重素性照合の分析を支持するものとなる。

これらの例は、日本語において目的語からの所有者繰り上げが、目的語が「が」格が与えられる場合には可能であることを示している。このことは日本語の与格主語構文の分析で容易に説明される。日本語の与格主語構文の主格目的語は、(LF で) T に移動することによって、T との「が」格の照合関係に入る (Ura (1999) 参照)。T の「が」格が日本語において多重の照合関係に入るとされる想定の下では、所有された名詞句「妹」だけでなく、繰り上げられた所有者の「が」格が、(LF で) T との格照合に適切に入ることができる。このことから(18b)の適格性が導かれる。一方で、日本語の「を」格は決して多重照合関係に入ることができないとすれば、(19b)の「を」格名詞句のいずれか1つは適切に照合されないで、(LF で) 非文として排除される⁽⁷⁾。

このことから所有者繰り上げの事実は、主格目的語が通常の主語として振る舞うことを示唆している。

第2の証拠は、「が」格が与えられる名詞句が、「が」格を与える接尾辞(助詞)から遠く離れた場所に生じる事実(long-distance agreement)から生じている。以下の例を考えてみよう。

(20a) ジョンに (は) [メアリーを頭がよく] 思われた

(20b) メアリーに (は) [ジョンを口が軽く] 思われた

ここでは、上記の形容詞にくっついた不変化詞「一く」は、連結詞「一い」の非定形 ([−tense]) の形だと想定される。すなわち「一く」は時制を備えていない ([−tense]) 文なので、「一く」の補文内では「が」格を与えることができない⁽⁸⁾。

Takezawa (1987) によれば、(20)の補文は英語の小節文 (small clause) に対応する日本語として想定され、従って(20)の補文には時制が無い ([−tense] である)。Takezawa (1987) が広範囲で議論しているように、日本語の「が」格は一般に時制の無い文 ([−tense] 補文) では利用することができない。

(21a) ジョンが [メアリーを/*が 美しく] 思う。

(21b) ジョンが [メアリーが美しいと] 思う

しかしながら、Takezawa (1987: 152-156) の指摘では、接尾辞 (助詞) が主文の認識動詞 (ECM 動詞) と結びついた場合、時制の無い文 ([−tense] 補文) でも、「が」格を与えることができるようになるという。

(22) ジョンに (は) [メアリーが美しく] 思われた。

日本語の主文 T は3つの素性 (EPP 素性や Φ 素性, 「が」といった主格素性) を全て与えきらなければならない。主文の「に」格の主語は、主文の T の EPP 素性と Φ 素性を受けとる一方、主文の T の「が」格素性の方も何れかの名詞句が受けとらなければならない。非定形補文 ([−tense] 補文) 内では時制が無いので、「が」格を照合することができず、(LF で) 補文の境界を越えて、主文 T に移動することによって、主格「が」の照合関係に入らなければならない。これが Takezawa (1987) や Zushi (1995) によって広範囲に論じられた日本語の長距離主格付与の説明である。従って、「が」格を受けとる為に主文 T に、遠く離れた位置から主格目的語 (主題項) が移動しているのは、非定形補文が時制を持たない ([−tense] な) ので、補文内では「が」格を得られないからである。今や(20)(= (23)) をもう一度見てみよう。

(23a) ジョンに (は) [メアリーを頭がよく] 思われた

(23b) メアリーに (は) [ジョンを口が軽く] 思われた

接尾辞 (助詞) が主文の認識動詞 (ECM 動詞) に結びついて補文主語が「を」格を受けとっていると想定してみよう。(23)の非定形補文の主語「メアリー」「ジョン」がその「を」格を照合する。

さらに、主文 T の「が」格は、非定形補文内で「が」を受けることができない為に、主格目的語（「頭」、「口」）が（LF で）主文 T と照合して適切に「が」格を受けとる。非定形補文内の主語は「を」格が与えられた為に、もはや主格目的語の「が」格の照合に対して、邪魔をしない（Chomsky (2001) 参照）。介在していた「を」格を受けとった名詞句は、既に照合されたので、さらなる「が」格の照合に立ち入ることはできない。従って、(23)の文は適切に生成される。この説明が、決定的に「が」格の照合が主文（[+tense] の定形文）T によって行われると前提してきたことに注目すべきである。

従って、日本語の与格主語構文において、経験者である与格も、主題項である主格目的語も、（主語としての）照合関係に入っていることを示唆している。このことが正しければ、Tada (1992) の想定とは異なり、与格主語構文の主格目的語は、T との「が」格の照合関係に入っていると結論することができる。

6. 結 論

本論文では、日本語の与格主語構文において、以下の(24)のように、（主語としての）多重照合関係を遂行していることを述べてきた。明らかに、日本語では「が」格が多重に照合関係に入ることができる。



(25a) ジョンが予想以上に日本人が英語がひどく感じた

(25b) ジョンには予想以上に日本人が英語がひどく思われた

具体的には、日本語の与格経験者（「に」）は主語との一致で(12)のように敬語化を引き起こすことが可能なので、T の EPP 素性を受けとることができるのに対し、主題項である主格目的語は（LF で）「が」格を受けとっている。両者が共に主文 T との照合関係を確立しているという日本語の特性を、世界の言語類型の観点から考察していくと、日本語の与格経験者は T の（EPP 素性の）照合によって主語位置に移動されるので、アイスランド語やイタリア語、スペイン語のような与格主語言語と同じ振る舞いをしていることが判明する（Park and Park (2004) 参照）。その一方で、日本語の主格目的語は、一番 T に近い要素である与格経験者を越えて、主文の T との「が」格の照合に入ることができる点で、英語の（overt な）照合関係と似た振る舞いをしていることが判明する。日本語では与格経験者が主語位置に現れるのは、日本語がイタリア語やスペイン語、アイスランド語と同じ空主語言語だからであり、また日本語が英語と同じように、経験者を越えて、その下に存在している主格目的語と「が」格の照合の為に（LF で）主文 T にアクセス可能であるのは、

英語と同様に日本語が T の多重素性照合関係に参与している帰結なのである (Boeckx (2007) 参照)⁹⁾。従って本論文では、今日のミニマリスト・プログラムが、日本語の与格経験者構文の統語現象の分析を通じて、T が多重照合関係に参与していて、この多重照合理論を英語だけでなく日本語にも拡張できることを強調し、言語理論が人間言語としての統一的な振る舞いを的確に捉えていることを示してきた。

謝 辞

本論文では、本大学の原口庄輔先生に貴重なコメントを賜りました。心から感謝の意を申し上げます。

〈注〉

- (1) 「経験者」とは、心理動詞が用いられる場合、その心理を経験・知覚・認識する人のことをいう。それに対し、「主題」とは、そういった心理を引き起こす原因や対象物をいう。
- (2) 生成文法の理論変遷は大まかに 3 つの時期に区分できる。第 I 期の標準理論 (1957~1980 年)、第 II 期の統率束縛理論 (1981~1990 年)。第 III 期のミニマリスト・プログラムである。第 II 期では、原理 (Principles) とパラメーター (Parameters) の観点から普遍的で抽象的な規定を試みたので、P & P アプローチと呼ばれる。第 III 期のミニマリスト・プログラムでは、第 II 期の多彩な規定を、人間言語として極めて単純で不可欠な規定にまで悉く極小化しようと試みる研究プログラムである。生成文法では「が」格を受け取る為に、統語構造上、TP-Spec に移動を引き起こすとされる (構造格)。(格)素性の照合と密接な移動現象は、統語構造上の素性間のやりとりで捉えられ、全ての人間言語の中枢に位置づけられているので、格照合理論と呼ばれている。Agr (O) P や TP というのは、格照合が行われる統語構造上の場所を表している。AgrP は一致句、TP は時制句であり、素性照合が行われる場所に関与している。
- (3) 日本語では、基本的に主格は「が」あるいは「は」、対格は「を」、与格は「に」で明示される。
- (4) Belletti and Rizzi (1988) は生成文法の歴史において、イタリア語の考察から、心理動詞が普遍的に経験者項と主題項を統一的に備えていることを指摘した。彼らは、一見心理動詞のような法則性が至らないように思われる領域でも、その背後には Burzio の一般化のような体系的な原理がイタリア語を越えて当てはまることを述べている。心理動詞の項構造に関して Belletti and Rizzi (1988) の想定に従う。つまり経験者は主題階層上、主題よりも常に高い位置に生成される。Burzio の一般化とは、外項を取る動詞は「を」格を付与できる特質をもつと規定している。従って、この一般化の帰結として、「を」格を付与できる心理動詞は、他動詞として経験者を主語に取ることができ、「を」格を付与できない心理動詞は、純粋な他動詞では無いので、経験者は外項としての特質を備えていないということが導かれる。
- (5) EPP 素性とは、主語の位置 (TP-Spec) に何らかの要素を移動しなければならないという規定に仕えている素性である。Chomsky (2000) は EPP 特性が顕在的な虚辞の有無とは関係なく、全ての言語に普遍的だと主張している。Φ (ファイ) 素性とは、(3 人称単数形のように) 名詞要素との一致に関与する素性である。名詞要素の特性を表す、性 (男性・女性・中性)・数 (単数・複数)・格・人称 (1・2・3 人称) をまとめて Φ 素性と呼ぶ。素性照合に関して、それが早めに行われるか、遅くに行われるかの区別がある。本論文では、overt は前者を、LF (covert) は後者を意味して用いている。
- (6) 本論文の文法性が本当に適格かどうか疑問を感じる人もいるかもしれない。しかしながら、言語を分析する際に、その文が非文 (*) かどうかの判断には、文法性 (言語能力) と解釈可能性 (言語運用) との違いがあることに注意されたい。生成文法が明らかにしたい側面は、前者である。本論文では、「が」格による多重主語が、解釈面において容認性を逸脱していると感じるかもしれないが、文法性 (言語能力) の面では全く逸脱していない。日本人話者は、明らかに「ゾウが鼻が長い」の文のように、

多重主語文を生成する言語能力を備えているのである。言語能力と言語運用の決定的な区別は、21世紀の言語研究においても明確に想定され続けなければならない。

- (7) 日本語は1つの単文に2つ以上の「を」格が与えられないことは容易に予想される。二重の目的語制約 (double-O constraint) というフィルターによって、1つの文内に「を」格が複数生じることは排除される (Hiraiwa (2001) 参照)。
- (8) TはEPP素性、 Φ 素性、主格素性を備えている。それらを使い切らなければ、その文は非文になる。このことが(1)と(2)の対比を説明していることに注目すべきである。「が」格の照合は ([+tense] の定形文) Tによって行われる。Shibatani (1978) は、日本語の定形文 ([+tense]) において、「が」格の要素が存在していなければならないと仮定している。Tの「が」格は、日本語において何とか照合されなければならないと規定することで、この仮定を素性照合理論に容易に浸透させることができる (Takezawa (1987))。従って、(21b)のように、「-い」は [+tense] なので、補文内で「が」格を照合できるのに対し、(21a)のような「-く」は [-tense] なので、本来、補文内で「が」格を照合することができない。
- (9) 英語の「It rains!」は、日本語では「雨だ!」である。このように、英語やフランス語では、このItのように、主語位置に顕在的な虚辞が表われる。一方、日本語やイタリア語、スペイン語、アイスランド語などは主語位置に潜在的な虚辞や空の主語 (pro) が現れる。前者を顕在的主語言語、後者を空主語言語という。Boeckx (2007) は、英語の与格経験者構文を説明する為に、 Φ 素性の下位区分 [person] 素性と [number] 素性の分離分析を採用しながら、多重素性照合を仮定している。

参考文献

- Belletti, Adriana and Luigi Rizzi (1988) Psych verbs and θ -theory. *Natural Language and Linguistic Theory* 6 : 291-352.
- Boeckx, Cedric (2007) Raising Across Experiencers Cross-Linguistically. In *Aspects of the Syntax of Agreement*, Routledge Leading Linguists, 150-161.
- Chomsky, Noam (1995b) *The Minimalist Program*, Cambridge, MA : MIT Press.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist Inquiries: The Framework. In *Step by step: Essays on minimalism in honor of Howard Lasnik*. Cambridge, MA : MIT Press, 89-155.
- Chomsky, Noam (2001) Derivation by Phase. In M. Kenstowicz (ed.), *Ken Hale: A life in Language*, Cambridge, MA : MIT Press, 1-50.
- Harada, Shin-Ichi. (1976) "Honorifications," in M. Shibatani (ed.), *Syntax and Semantics 5: Japanese Generative*. Grammar, Academic. Press, New York. pp. 499-561.
- Hiraiwa, Ken (2001b) "Multiple Agree and the Defective Intervention Constraint in Japanese," MIT Working Papers in Linguistics 40, 67-80.
- Kuno, Susumu (1973) *The Structure of the Japanese Language*. Cambridge, Mass.: MIT
- Park, Jong Un and Myung-Kwan Park (2004) "Intervention Effects in Experiencer Constructions and Their Implications for the Theory of Move and Agree," *Studies in Generative Grammar* 14(2), pp. 199-224.
- Shibatani, Masayoshi (1977) "Grammatical Relations and Surface Cases," *Language* 53: 4, 789-809.
- Shibatani, Masayoshi (1978) *Nihongo no bunseki*. Tokyo: Taishukan.
- Tada, Hiroaki. (1992) Nominative objects in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 14 : 91-108.
- Tada, Hiroaki (1993) *A/A-bar partition in derivation*. Ph. D. dissertation, MIT.
- Takezawa, Koichi (1987) *A Configurational Approach to Case-Marking in Japanese*. Doctoral dissertation, University of Washington, Seattle.
- Toribio, Almeida Jacqueline (1990) 'Specifier-head Agreement in Japanese', in. A. Halpern (ed.), *Proceedings of the 9th West Coast Conference on Formal Linguistics (WCCFL 9)*, Stanford

Linguistics Association, Stanford, pp. 535-548.

Ura, Hiroyuki (1999) "Checking Theory and Dative Subject Constructions in Japanese and Korean."
Journal of East Asian Linguistics, Volume 8, Number 3, pp. 223-254.

Zushi, Mihoko (1995) *Long-distance dependencies*. Doctoral dissertation, McGill University, Montreal.